

# RMM～その先の希望～

夜泣マクーラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

挫折と絶望に塗れたウマ娘、ライスシャワー。そんな彼女ともう一度あの日の続きを  
と望む二人、ミホノブルボンとメジロマツクイーンがライスを導く。そして、ライスを  
支え続けたもう一人、トレーナーの木瀬三月……これは、鬼が目覚めるまでの四人の物  
語――

# 目次

勝利の先に手にした物	1
挫かれた誇り、鬼への誓い	25



# 勝利の先に手にした物

ふと、涼やかな風を感じながら澄んだ青空を見上げたあの日を思い出す。

これから赴くのは勝負の場……ううん、恐怖だけで染め上げられていた場所。

綺麗な緑に彩られているはずの芝は、私の目には夥しい悪意に染められているかのよう  
に映る。

今か今かと名勝負を期待する観衆の視線は、ギロチンでの斬首を待ちわびる歪な笑みを浮かべる人々のよう。

私に送られる声は、糾弾と断罪と怒号と怨嗟……ありとあらゆる悪意が込められている。

そう、私は誰にも望まれず、私は何も望まず、この目には希望も絶望も全て映る事はない。

だって、私が望むことは皆から笑顔を奪ってしまう。私の一生懸命に皆は落胆し溜息を吐く。それどころか、湧き上がる怒りを声に乗せてぶつけられる。

いつか、あの人が言った言葉……小さな身体でも皆の希望になれるって、諦めなければ笑顔を届けられるって言ってくれた……その言葉を私は信じられなくなってしまう

た。

もう嫌だ、走りたくない、こんな足なんて動かなくなってしまう方がいい。

レースに向かう足は、一歩近づくとたびに足枷が増えていくように重くなり、もうどうでもいいと無気力に走る日々。

いつしか私は笑う事も泣く事もなく、機械のように生きるようになっていた。適度に練習を重ね、適当に先頭にならないように走る。誰の目にも映らないように、群れの中に身を隠す様に走る。

これで良いのだと、私は自分自身に目隠しをして走り続けていた……あの人の、木瀬三月（きせみつぎ）の優しさと強さに守られているとも知らずに。

少し前の自分を思い出し、挫けてしまいうような心を奮い立たせる。

誘導員の指示に従いゲートへと向かう。目の前には処刑場のような空気が漂っているコースがあり、怖気づいてしまいうような両足。

蘇るのは人々の憤怒の形相と声。余計な事すんな……そんな声が今も耳の奥にこびり付いて離れてはくれない。

後退りしそうな足をしかし、関係者席で応援してくれる三月さんの姿が勇気をくれる。後退りしそうな足をしかし、関係者席で応援してくれる三月さんの姿が勇気をくれる。

こんな私を諦めることなく傍で支え続けてくれたあの人に、私は報いる為に再び走る。

事を決意した。彼女がすぐそこで私を見ていてくれる。なら、それで十分。それだけで私は走ることが出来る。

私は唯一人、あの人の為だけに走ろう。あの人が笑ってくれるのならそれだけでいい。それで、いい。

フアンの罵声も怒声も、美月さんの笑顔の前には掻き消えてくれるはずだもの。

レースの始まりを告げるファンファーレに前を向く。

さあ、始めよう。今日、ここから始めるんだ。私が心から望む笑顔の為に……

——私の、ライスシャワーのレースをここからツ……——

なんで私がこんな事をしないとイケないのよッ!!

ボイスレコーダーと手帳とペンを持ち、ダイワスカーレットは不満を心の内で叫ぶ。

今や最強のチームと名高いチームスピカの一員で、最強のウマ娘の一人に数えられる彼女は、なぜかこの日だけはピシッとスーツを着て眼鏡をしている。いつもならライブルのウオッカと言い合いをしながら競い合って練習をしているはずなのだが、どういった事かジャージ姿ではない。

それもそのはず、なぜなら今の彼女はインタビューアとして目的の場所に向かっているのだ。

そもそもなぜこのような事になったのかと言えば、一月後に開催されるレース……『ウインタードリームステイヤークップ』に端を発する。

今年から開催されることが決定されたこのレースは、シンボリルドルフ会長がある二人の熱意に胸を打たれて着々と入念に計画してきたレースで、ファンの注目度も高いレースとなった。出走するメンバーも層々たる面々となっている。

一枠一番から名前を上げていくと、メジロマックイーン、マヤノトツプガン、セイウンスカイ、サクラローレル、ミホノブルボン、シンボリルドルフ、オルフェーブル、スペシャルウィーク、マンハッタンカフェ、ピワハヤヒデ、ディープリンパクト、タマモクロス、ナリタブライアン、スーパークリーク、ゴールドシップ……と、最強の称号を誰が冠してもおかしくない面々が揃い踏みこのレース。

全十六名で争われるこの名譽あるレースはこの豪華メンバーというだけでも話題に事欠かないというのに、そこにもう一人参戦すると発表した瞬間にファンが歓喜の声を上げたメンバーが加わる。

そのウマ娘にファンは何を想うのだろうか。単純に喜びだけではないのは確かだろう。なぜなら、そのウマ娘に対して自責の念を胸に抱く者も少なくないはずなのだか



ら。

当時の事を知るウマ娘ならば、誰もが目を背けたくなるような悪意に彼女は晒されてしまったのだから。

一生懸命、ファンに笑顔になつて欲しい。希望を持つて欲しい。その想いを心に抱いて走つたはずの彼女はしかし、後にこう呼ばれてしまう。『黒の刺客』『悪役（ヒール）』と……決して懸命に走る者を貶してはならない。ましてやその姿に罵声を浴びせてはならないというのに、誰もが彼女の想いを慮る事もなく、無遠慮に破き捨てて踏み躪つた。

あつてはならない、醜悪なその出来事がファンの脳裏に今もあるはずだ。だからこそ、ファンは複雑な感情を彼女に抱く。素直に喜びたくても喜べない者も多いのだ。

そんな彼女、ライスシャワーが『ウィンタードリームステイヤーカップ』に参戦する事が発表され、業界に関わる人々だけではなく、ウマ娘達もざわついた。

一世一代のレースを前に、心の中に後悔を持つファンのためにも、当時の事を記事にするべきではないかと、会長主導の下号外を発行する事となり、では誰がインタビューをするかとなった。ここで察する事が出来るだろう。なぜスカレットがインタビューアールとして働かなければいけなくなつたかを。

端的に言えば、チームスピカのトレーナーがじゃんけんで負けて仕事を背負い込み、

消去法でインタビュアーとして彼女が選ばれたのである。

スペシャルウィーク、メジロマックイーン、ゴールドシップは出場予定なので論外……というよりもマックイーン以外はそもそもこういった仕事は任せられない。次にウオツカは脳筋で除外。残るはトウカイテイオーとサイレンススズカなのだが、彼女達もまた別な意味で除外されてしまう。つまり最後に残るのは比較的常識を知っているスカレットトだけという、なんともどうしようもない理由でこの仕事を引き受けるしかなかった。と言つても、トレーナーからそこそこの賄賂（人參）をすでに受け取っているの、そこまで理不尽な仕事でもないのだが。

ライスシャワー先輩、か……とスカレットは彼女に関して想いを馳せる。

直接対決したことはないけれど、マックイーンとのレースを一度だけ目にしたことがある。

絶対王者と謳われたマックイーンが負けるわけがないと、スカレットは確信していた。

あの時のマックイーンを相手に勝つのは容易な事じゃなかった。トウカイテイオーでさえも彼女を捉えきれなかったのだから。しかも3200mという距離は才能だけで勝つことが出来ない距離だ。2500mまでならば負けはしないと闘争心が燃えるけれども、長距離はそうはいかない。正直、私じゃ不可能に近い……

圧倒的なレースセンスと体力、揺るがない強さを誇る気持ち……あの時のマックイーンは全てを満たしていた。だから、夢にも思わなかった……あのマックイーンがあんなにも必死の形相で食い下がっても追いつけない相手が現れるだなんて。

あのレースの後のマックイーンがトレーナーに向かって言った言葉が今も忘れられない。

——ウマ娘のままでは鬼には勝てませんわね——

あの言葉の真意は今でもわからない。でも、マックイーンは敗北を誇らしげに、そして更なる高みを目指すとしても言うように不敵に笑っていた。

「とっ、危ない危ない、通り過ぎるところだったわ」

チームの部屋が並ぶ通路の一番端。そこにライスシャワーが所属するチームの部屋があった。『ダネブ』とボロボロの木の板に所々剥げた黒いマジックで書かれている。まるで弱小と呼ばれていた『スピカ』のようで、思い出して少し笑ってしまう。

こほんと、一つ咳をして軽くノックすると、とても柔らかで牧歌的とさえ思える声でどうぞと中から聞こえた。

「失礼します。本日『ウインタードリームステイヤーカップ』の取材で訪れましたダイワ

スカーレットです。よろしく願います」

扉を開け、中に入るとスカーレットはどこか大人びた雰囲気であやうく顔を上げる。「あらあら、ご丁寧ありがとうございます。私はチーム『デネブ』のトレーナーをさせて頂いております、木瀬三月です。よろしく願います」

顔を上げた先には、春の木漏れ日を感じさせるような、柔らかな温かい微笑みを浮かべる木瀬三月……ライスシャワーの育ての親が紅茶を用意しながらそこにいた。

「あの子との出逢い？」

「はい。木瀬トレーナーはどうしてライスシャワー先輩をチームに迎えたのか、まずはそこから聞きしたいと思います」

おっとりとした雰囲気、紅茶を手にながら頬に左手を添えて首を傾げる。

ふんわりと香る紅茶は彼女の様だと思いつつ、スカーレットも一口口にしつつ三月に再度尋ねる。

「これはうちのトレーナー等から聞いたのですが、そもそもライスシャワー先輩をチームに迎えようとしたのは木瀬トレーナーだけだったという話がありまして、もしかして木瀬トレーナーだけはライスシャワー先輩の非凡な才能を見抜いていらつしやつたのではないですか？」

そう、うちのトレーナーを始め、どのトレーナーもライスシャワー先輩に特別な物を見出していなかった。それどころか、身体が小さく、特筆した強みもないと評価していたのだと言う。

だというのに、彼女は後に鬼と呼ばれるほどの異質な強さを発揮した。あのチーム『リギル』のトレーナーでさえも、後に彼女の強さを称賛している。

ということとは、木瀬トレーナーだけが感じた才能があったとしてもおかしくはないという意図からのスカーレットの質問だったのだが、美月はまじまじと見つめてくるスカーレットにころころとおかしそうに笑ってみせた。

「ふふ、あははは。それは、ないかなあ〜」

肩透かしを食らい、肩から崩れ落ちそうになる。

「そ、それじゃあどおしてチームに誘ったの……です、か？」

つついっい敬語を忘れそうになり、取り繕った言葉になってしまった。

「ふふふ、無理に敬語じゃなくてもいいのよ。私なんて大層なものじゃないんだから。むしろ、そのままの貴方とお話してみたいのだけど、駄目かしら？」

年上とは思えない可愛らしいおねだりに、ふっと笑みが零れてしまう。

三月の穏やかさに充てられ、スカーレットの肩の力が抜けたようだった。

「そお？じゃあ、素のまま取材させてもらうけどいいの？」

「ええ、その方がとっても話しやすいもの。えっと、ライスとの出逢いだけど……ねえ、私のチームを正直にどう思うかしら？」

逆に問われ、スカーレットはどう答えたものかと頭を悩ませる。正直な事を言えば失礼になるかもしれないという不安があったからだ。

「とても強そうには見えない……じゃないかしら？ ううん、もつと言えば弱いと断言してもいいかもしれないわね」

穏やかな表情のまま、正に自分が抱いた感想を口にされ驚くスカーレットに、ふんわりと三月は笑みを向ける。

「そう、私はトレーナーとして肝心の才能がなかったの」

「才能？」

「ええ。貴方達の秘めた才能を見抜く眼がね、私には致命的にないのよ」

確かに、それは致命的だと胸の内で頷く。トレーナーならば誰もが持ち合わせるべきものを彼女は持っていない。それは確かに致命的ねと、スカーレットは苦笑してしまふ。

「それでもね、才能がなくてもトレーニングで才能を超えられるって、私はみんなにも、そして何より自分自身に強く言い聞かせてきたの。そんな意地をね、何年も張ってきたのだけれど……ある日、理事の方々について言われたのよ。結果をいつまでも出せない

チームに割く余分な費用はないってね」

「でしようね。私達の世界って綺麗事だけじゃない、慈善事業じゃないもの」

「そうね。だけど、このままチームがなくなれば、みんなが行き場を失ってしまふ。何としても守らないといけないって、なんとかしようとしてとレーニングを厳しくしたりしてみたのだけれど……それでも結果は出なかったわ。おはなちゃんったら、全然手を抜いてくれないんだもの」

冗談めかして言う言葉。しかし、スカーレットは別な事に噴き出してしまいそうになる。あの鋼鉄のトレーナーをおはなちゃん！お・は・な・ちや・ん！

あまりの衝撃に緩む頬を抓って堪えたのだった。

「諦めなければ夢に手が届く……その信念がね、音を立てて崩れそうな時だったかな、あの子と出逢ったのは」

窓の外に視線を向ける三月の目に映るのは、遠い日の二人の運命が交わった情景なのだろうか？

「あの子って、ほら。とつても小さいじゃない？一緒に走ってる子たちよりもずっと小さくてね……才能もあるわけじゃなかった。それは間違いないって言えるわ。あの子に非凡な才能なんて一つもない。だけど、それでも誰よりも強い。誰よりも小さな身体で、それなのに誰よりも強かったわ」

「強い?」

「ええ、どのウマ娘よりも、おはなちゃんのところの子達よりもずっと強い眼をしていたの」

懐かしさと愛おしさと誇らしさと、ありとあらゆる感情がその声に込められていた。その声だけで、ああ彼女にとってもライスシャワーは格別で特別な存在だったのだと実感する。

「決して目を伏せず、顔を背けず、前を行く背中を体全部で掴まえようとするかのように走っていたの。その姿がね、私には眩んでしまいそうなほどに眩しくて、羨ましくて……あの子の走る姿に諦めてしまいそうな心を殴られた気がしたわ」

「だからチームに迎えたのね」

「ええ。そうして、私は彼女と歩み始めたの……私の小さな小さな英雄とね」

「ライバル……と私は認識などしてはいませんでした」

タオルで汗を拭いながら、一通り筋トレのメニューをこなしたミホノブルボンは応えた。

無駄のないしなやかな筋肉はまさに肉体美の集大成。かのプロワイエでさえも彼女に及ばないであろう。血の滲むトレーニングの賜物だなんて、それだけでは言い表せない



い努力を彼女はしてきたに違いない。

スカレットとは別に、スズカはライスシャワーのライバルと名高い彼女にインタビューをしていた。

「そうなの？」

「はい。臆月賞ではライスの姿は遠く後方でしたし、ダービーではライスは二着とはいえ、それでも取るに足らないと視野にも入れていませんでした」

「そうなの。じゃあ、ブルボンちゃんはいつからライスちゃんを意識し始めたのかしら？」

「いつから、ですか……そうですね、正直私自身ライバルと認識したことなんて一度もありませんでした」

その答えにスズカは首を捻る。

「でも、京都新聞杯ではあと少しの差だったように思うのだけれど……」

スズカのもつともな疑問に、後悔を噛み締めたかのような表情を浮かべた。

「ええ、その通りです。ですが、私はこう考えてしまったのです。この程度ならば、更にトレーニングを重ねてスタミナを付ければ問題はないと……そして、その間違いがあつたの悲劇を産みました」

悔恨の日を思い出し、彼女は拳を握り締める。

そして、ミホノブルボンの口から懺悔と後悔と失望に塗りたくられたあの日の、無敗の三冠をその手から零してしまったレースが語られる。

『スピード文句なし、パワー充分、問題はスタミナだが鍛えに鍛えぬいて敵はなし！まさに今！無敗の三冠馬誕生と言う歴史的瞬間がすぐそこに迫っています！私の、ファンの夢を背に今菊花賞がスタートツ！！』

脈拍は正常、気力体力問題なし。スタート直前に自己分析を済ませ、いつものレースだと自分に言い聞かせる。

今なら例えルドルフ会長が相手でも捻じ伏せられる。その強い確信と共にスタートを切る。

好スタートを切り、このまま自分のペースに持ち込むために先頭に立とうとしたが……

「へへへ、今日はそうはいかないようだ！」

キョウエイボーガンがペースも考えずに鼻に立つ。

舌打ちしてしまいそうになるが、ブルボンはこの位置はデビュー以来だなど余裕を見せる。

この位置でもペース的には先頭にいるようなもの。ボーガンはあの走りではそのう

ち脚が保てないまま失速するだろう。なら、この位置でも何一つ問題は無い。走り終えれば私は最強を手に入れている。

800mを通過するとファンの歓声が耳に心地よく、つい笑みを浮かべてしまう。

ああ、私の走りに熱狂してくれているのか。その熱狂をゴールと共に歓喜の声へと変えて見せよう。それが今まで応援してくれた貴方達への私の恩返しだ。無敗の三冠を貴方達に捧げよう。

3000mという長距離に彼女は微塵も不安など抱かなかった。3000mどころか3800mでも戦える身体を作ってきた。虚構ではない自信をその身体に宿してきた。万に一つも敗北などあり得ないという自負……そう、この時のブルボンには一流の才能と実力を持つどんなウマ娘が相手でも敗北などあり得なかつただろう。ウマ娘の中に別の何かが潜んでいるなどと、誰も想像など出来なかつたのだから。

彼女がソレに気付いたのは第四コーナー手前でのことだ。満を持してボーガンを抜こうと足に力を込め、芝を駆けつけた瞬間、ブルボンは得体の知れない何かに首筋を撫でられたかのような悪寒を感じた。

(……今のは一体……いや、余計な事を考えるな。私が先頭に立てば目の前には何者もない景色だけだ。走りを乱すな)

自分を強く叱咤するも、ブルボンは冷たい汗が流れるのを止められずにいた。

正体不明の寒気はまやかして、自分の弱さだと打ち捨てる。

(あと300m……なら、この悪寒ごと振り切って見せようッ！)

もう一段階、残る力を振り絞りブルボンは直線を目一杯スパートをかける。何者も自分の前を走る事は許さないと、その背が強者のプライドを語り、誇っている。

その強者の耳に、不気味な音が届いた。

「——捉まえた」

漆黒の身体から青い炎が揺らめいている。小さな身体が更に小さく低く、弾丸のように疾走する。

(なッ?! ライスシャワーツ?!)

横に並んだライスシャワーに動揺を隠せない。

その姿は正に獲物に喰らい付く獣であり、瞳に宿していたのは殺気にも似た気迫。立ち昇る青い炎がより大きく燃え盛る。漆黒に蒼き炎を身に纏い、弾丸が標的を打ち抜いてもなお衰えずに疾走していく。

(そうか、悪寒の正体は……)

「ふざけるなああああああッ——!!!」

身体の中に残る全ての力をあらん限り使って、その背を捉えようと手を伸ばすも、すでに放たれた弾丸は捉まる事はない。

目の前の背中が一步駆ける度に遠のいていく。まるで幽鬼のように……そこでブルボンは気付く。

（鬼……この者はウマ娘ではない。ウマ娘が、あのような鋭利で全てを畏怖させるかのような気配を纏うはずがないッ。あの者は、正に鬼のようなウマ娘、か）

「なるほど……そうね、ライスちゃんは確かに普通ではないもの」

「スズカ殿にもわかるのですか？」

「ええ、少しだけ、ね？」

きつとその尋常じゃない気配を身を持って知っているウマ娘は少ない。端で見ている気付けないオーラをライスは持っているのだ。それこそ、鬼と形容される所以なのだから。

「えつと、つまりライスちゃんを歯牙にも掛けていなかったことが悲劇つてことかしら？」

スズカの質問に、目を伏せながらブルボンはそれももちろんありますと応え……

「私がライスを敵と認識し、もつと鍛錬をしていればと悔やまぬ日はありません。ですが、それだけではないのです」

「それだけじゃないと言うと？」

ブルボンは今の表情を見せるわけにはいかないとも言うように、スズカに背を向けて口を開く。その声は震えていて、自虐と自責と失望に彩られていた。

「あの日から、私は走ることが出来なくなりました……多分、マックイーン殿も同じではなかったかと思えます」

その言葉にスズカは驚きを隠せなかった。あの日、春の天皇賞を走り終えた日からマックイーンは長い間走ることを止めてしまった。はじめはライスに負けてしまった事がショックで氣力が湧かないだけかと、スピカの全員が思っていたのだが、しばらく経つても彼女は精力的にトレーニングをすることがなかった。

それを見かねたテイオーがマックイーンに詰め寄った時、彼女はポツリと呟いた言葉……

『夢の先の絶望を知ってしまったのですわ』

その言葉の意味をその場にいた全員が知る事も出来ず、唯一スピカのトレーナーだけがその意味を知り、苦虫を噛み締めた表情で声を掛ける事も出来ずにいた。

「ブルボンちゃん、もし言い辛いのなら無理には聞かないけれど、その理由を話してもらえるかしら?」

スズカの労わるような問い掛けに沈黙が降り、少しの間を置いてブルボンの重く閉ざされた唇が絶望を紡ぎ出す。

ブルボンの、ライスの心を引き裂き、蹂躪し、拷問し尽くすあの日の出来事を……

ゴールを駆け抜ける背中を唇を噛み締めながら、この屈辱を忘れることがないよう、その目に焼き付けながら、死力を尽くしたその背中へと一歩ずつ駆け寄る。

足を止め、命を燃やし尽くすかのような走りを見せたライスシャワーは、全身で息をして今にも倒れてしまいそうだった。

(……これは、気迫の差だったのかもしれないな)

自分自身も死力を尽くしたとはいえ、なんとかまだ歩けるだけの力はある。対してライスシャワーは歩く事も出来ずに、息を吸う事が精一杯の相様。

(どおりで鬼と呼ぶに相応しい気配を纏うわけだ。ならば、次は鬼退治してみせましょう)

「……見事な走りだった、ライスシャワー。今回は私の完敗だ」

小さな鬼へと手を差し出すと、その小さな身体と同じように、小さく儂い笑みを浮かべてライスは手を握り返す。

「ありがとう、凄く楽しかったです。あなたの背中を追いかけるのが楽しくて楽しくて、

だから今日まで頑張れました……だから、もつと楽しいレースをこの先も私としてくれますか？」

（なんとということだ。この者は私の背を追い掛け続けたからこそ、こんなにも強くなったのだと言うのか……だというのに、私はライスシャワーの想いに今の今まで気が付かなかったとは……こんなにも近くにも近くに宿敵がいたというのに）

ブルボンよりもずっと小さな手を、ぎゅつと握り返してブルボンは宣言する。

「ああ、ああ！今度は私がライス、お前の背中を撃ち抜いて見せよう！」

同世代に追いかける背中がある事のなんと嬉しい事か……感動に震える胸の内の感情を原動力に、もう一度鬼に挑む決意を秘めてブルボンはライスの背中を押す……そこに絶望がある事を予期することも出来ずに。

「さあ、フアンに胸を張って応えてこい！」

「うんー！」

満面の笑みでライスはファンの前に掛けていく。

自分に勝つたんだ、沢山の称賛と祝福をその身に浴びてくるがいい。その名前のように。

それが彼女、ミホノブルボンを、生涯のライバルを絶望に叩き落す始まりになるだなんて夢にも思わずに。



敗者は去るのみ、と背を向けた瞬間だった……

「空気読めよ馬鹿ツ!!!」「本物の馬鹿だろテメエツ!!!」「こっちはブルボン観に来てんだよ！テメエが勝つてどうすんだよツ!!!」「ふざけんなツ!!!帰れよツ!!!」「マジねえわく！金返せよ!」「死ねようもう!」「ありえねえく！誰も期待してねえからさあ！こんなのよお！」

な、んだ？何が起こっているんだ？

罵詈雑言が嵐のように場内に響き渡る。その声は死力を尽くして懸命に走り、フアンの笑顔と夢の為に得た勝利者に送られて良い言葉じゃない。

現実じゃない、これは悪夢ではないかと目と耳を疑うが、紛れもない真実なのだ。次の瞬間に現実に立ち戻った。

フアンが罵声と共に投げた缶がライスに当たる。まだ中身が入っていたのか、ライスの髪から雫が滴っていた。

「な、何をしている貴様等アツ——!!!」

呆けている場合ではないと、ブルボンは全力でライスの下まで走り寄ると……

「ライ、ス?」

ライスは掲げた手をそのままに、表情は歪な笑みのまま凍り付いて、何者よりも強い瞳は色を失いつつあった。

何度かブルボンが声を掛けるも、ライスは不格好な笑みを浮かべ、消え入りそうな声で大丈夫、大丈夫と繰り返す。

(何が大丈夫なものかッ!?)

これ以上ライスが傷つかないように、ブルボンは彼女を抱き寄せる。

こんな事が許されるのか!? 夢を追い、希望を抱いて、自分を誇りたくて、皆に笑顔になつて欲しくて、誰の記憶にも残つていたくてッ!! 自分の生きた証を、足跡をその胸に残して欲しくてッ!! そうして走つた者に、このような仕打ちが許されるのか!?

何が三冠を阻止するんだ、何が夢だ、何がフアンの為だ、何が自分の為だッ!! ふざけるなふざけるなふざけるなッ!!

「そこどけよブルボンッ!! 俺達はお前のた「戯言を抜かすな貴様等アッ!!!」

臆月賞、ダービーを制した時、皆が私を褒め称えてくれた。笑顔で祝福してくれた。私の走る姿に勇気をもたらったと言葉にしてくれた人々がいた。それが嬉しくて、私が走る事で誰かをほんの少しでも支えられることが誇らしくて……だから、どんなに厳しい鍛錬でも耐えることが出来た。自分の為、皆の為、夢の為……私達は走る事に意味を見つけ、その為に走ることが出来る。

!!!!  
だから、私は今日までどんな鍛錬でも耐え抜けた……だというのに、なんだこれはッ

私は、こんな醜悪な者達の笑顔の為に走っていたというのか？だとしたら、これまでの日々のなんと滑稽な事か。

私の日々は決して誇れるものではなかった。決して、この者達の醜悪な笑顔の為に走ってきたわけではない。

走る意味がどこにあるというのか……

失望と喪失感に心が覆い尽くされようとした時、ふと腕の中で震えるライスへと視線を落とす。

（いや、今はそれどころではない。とにかくライスをここから連れ出さなければ）

ライスを両腕で抱えて場内を出ようと歩き出す。

腕の中でライスはぼつぼつと、震える声で呟き続けた。

「が、んばら、ないと。もつと、もつと、沢山、沢山がんば、れば……だい、じょうぶ……み、みんな、きつと……わらって……」

そうだ、今辛いのは私ではない。あの悪意の嵐を一身にこの小さな身体で浴びていたのはライスだ。

か細い声で、あの絶望を目の前にしてもまだライスは、頑張る、頑張ると呟き続ける。その姿にブルボンは心臓を手で鷲掴みされたかのような息苦しさを覚え、ぎゅつと彼女の身体を強く抱く。

「す、まない……私がつと、もつと鍛錬していれば、こんなことには……私が勝つていれば、こんなにも傷つける事などなかったのになあッ……すま、ない……ライス……」  
退場する二人に、まだ足りぬとフアン達の荒んだ野次が降り注ぐ。その言葉をなるべく聞かせないように、ブルボンはライスの耳を自分の身体に押し付けるようにする。

騎士のように気高くなりたいと夢見ていた……それなのに私は、こんなにもライバルを傷つけてしまった。何が騎士のようになりたいだ、何が皆の為だ……純粋を汚す刃を持つ者達の為に、私は走ってきたわけではないッ!!

「あ、あの、勝利者インタビューを……」

勝利インタビューをするために近付いてきたアナウンサーからマイクを奪い、ブルボンはライスを関係者に預けて場内へと戻った。

その瞳に紅蓮の炎を思わせる覚悟を秘め、決別の意思を轟かせる為に――

――二度と……私は二度と、貴様等の為に走る愚行を起こさないッ!!!!――

その一言を言い放ち、マイクを芝に叩きつけ、彼女はターフを去った。

悔恨と懺悔と失望と絶望と……ライスへの憐憫を深く、海よりも深く、心の深奥に刻んで……

## 挫かれた誇り、鬼への誓い

「怖い……初めて私はライスをそう感じたの」

紅茶を口にしながら、目を伏せて木瀬三月は語り出す。ライスシャワーにとって、悪夢の始まりである菊花賞後の彼女の事を。

後悔を滲ませる言葉に眉を顰めるダイワスカーレットに、三月は苦笑した。

「勘違いしないで欲しいのだけれど、それまで私はどの子達にも恐怖なんて感じた事ないの」

「あのね、私はそんな事で勘違いしないわよ。ただ、何が怖かったのか気になっただけ。情緒不安定になって暴れたとか？ま、私だったら観客席に乗り込んで一人残らず制裁するでしょうね」

肩をはずませずおどける姿に、三月はどこか安心したように微笑む。

「ふふふ、ライスはそんな乱暴者じゃありません」

「あら？悪かったわね、乱暴者で」

顔を見合わせ、二人は同時に吹き出して和やかな空気が流れる。

そうしてひとしきり笑い合った後、三月は再度語り始める。

「菊花賞で勝った後ね、あの子私にこう言ったの。『ごめんなさい、今度はもつと、もつと完璧に勝つようにするね。そうすれば、今度こそ皆喜んでくれるはずだから』って……何事もなかったように、そう言ったのよ」

三月の口から当時の様子を聞いたスカーレットは、ああ、なるほどと得心した。

先程の三月の怖いという言葉の意味は、ライスシャワーの異常性によるものなのだろうと。

不条理に、理不尽に勝利を汚されたにも関わらず、彼女は当たり散らすでも、挫けるわけでもなく、ましてや悲しむでもなかった。数えきれないほどの悪意を受けてもお、彼女は前を向くことを止めず、今の自分の非力が原因だと自分を叱咤したのだ。その精神のなんと強靱な事か……想像してスカーレットは内心震えてしまう。

「前にタイシンちゃん走れなくて悩んでいたことがあったわね。期待に満ちたフアンの視線、その期待に応えられない自分に絶望にも近い怯えを抱いていた……当たり前前ね。貴方達が背負うものは軽いものじゃないから」

そうねと唇を噛み締めてスカーレットは応えた。自分達の走りに夢や希望を抱くフアンの視線、期待は並大抵のものではない。その重さに負けないよう、自分を見失わないようにいつだって彼女達は戦っているのだから。

「でもね、私はこうも思ったの……甘えないでよって。言葉の暴力の中、誰にも期待もさ

れず、誰にも望まれず、誰にも声援を貰えないあの子はどうなるの？あの子と代わってよ……あの子の苦しみを貴方が、他の子が代わってって」

他に漏れたら問題になりかねない発言だが、ここには咎める記者などいない。ライスシャワーの苦しみを、葛藤を誰が知ることが出来るだろう。少なくとも自分には軽々しくわかつてるなんて言えないと、スカーレットは言ってしまうような言葉を喉の奥に押し込んだ。

「それから、あの子はそれまでの数倍ものトレーニングを自分から始めたわ。普通なら脚への負担が掛かり過ぎて、怪我をして走れなくなってしまうようなメニューを毎日、脇目も振らずにね」

「止めなかったの？」

トレーナーならば、そんな無茶は許してはいけない。トレーナーの仕事には、彼女達の未来を守るという使命も含まれている。

そんなことは百も承知の三月は、黙って首を横に振った。

「何度も止めたわ。でも、あの時のライスは周囲の言葉に耳を貸す余裕なんてなくて、どんどん、どんどんあの子の身体は研ぎ澄まされていったわ。鬼気迫る、というのはあの時のライスを表すのにぴったりの言葉ね。あの時のライスが何を見ていたのかはライスにしかわからないでしょう。でも、それは決して幸せな光景じゃなかったはずよ。幸

せな光景を、あんな射貫くような視線で夢見るわけがないもの」

ブルボンのトレーニングは常軌を逸しているともつぱらの噂というか、事実なのが、きっとそれ以上の過酷を自分に強いていたのだらうと想像に難くない。

「なるほどね……でも、そのトレーニングの甲斐もなく有馬記念では惨敗だったみたいね」

たはは、と頬を掻きながら三月はあれは私の所為ねえくと目を逸らす。

「その、ね？あれは、だって……ねえ？」

「何がねえ？よ」

「あなたのチームの方が理由は知っているんじゃないかしら？」

もちろん、スカーレットも惨敗の理由はよおしく知っている。なぜなら、その有馬記念では『スピカ』のメンバーであるトウカイテイオーが参戦していた。当時最強の名を欲しいままにしていたテイオーは、もちろん一番人気での出走であり、周りのライバル達も全員がテイオーを意識していた……のだが、『スピカ』の仲間内だけの秘密がある。実はこのレースの前日にテイオーはとんでもない体調管理ミスをして……食中りと言う名のどうしようもないミスを。

前祝いだと奮発したトレーナーが産地直送高級人参料理をテイオーに振舞い、テイオーはもちろん、メンバー全員が尻尾を振って料理にがつついた。それはもう、野生に



返った虎のように食った……そして全員が腹を下したのだ。きつとレース中のテイオーの敵は、いつ噴火するとも限らない腹痛だったに違いない。ゴール後、レース以上の末脚でテイオーはどこかに消えた。十分後、戻ってきたテイオーの顔は、三冠を手にしたかのような輝く笑顔をしていたらしい。しかして、その責任をトレーナーにどう取らせたかは語るべくもない。さらばウマ漢。

そんな事を知らない三月は、テイオーに注意するよう指示を出し、レース中いつまでも仕掛けないテイオーに引つ張られてライスシャワーは惨敗。万全の状態で臨んだ有馬記念だったが、三月の指示ミスによりあっけなく負けてしまったのだ。

「はあく……よくライス先輩はあなたの元にいるわね」

「あ、謝ったわよちゃんど？ 帰ってきたライスに土下座しましたとも！ でもほら、あの子優しいから、笑って許してくれたのよ。私の力不足だからって、もつと頑張るって」

「……ライス先輩が本格的に鬼化したのって貴方の所為なんじゃ？」

「ちくがくいくまくすうく！」

疑わしい事この上ないが、これ以上突っ込んで話が進まないかと、藪を突つつくのを止めて話しを進める。

「まあ、いいわ。それじゃあ、次は——」

「ライスさんとの春の天皇賞の話ですって?」

純白の美しい髪を梳かしながら、メジロマックイーンは頬を引き皺らせた。

トレーニング後、シャワーで汗を流して戻ると、いつの間にかトウカイテイオーがベッドに我が物顔で居座っていた。

マックイーンに一切の遠慮のない旧知の間柄のテイオーが、不躰に訪ねてくるのはいつもの事なので、気にするだけ時間の無駄と割り切っている。しかし用を尋ねると、今度のレースの為の取材の為にライスの事を聞きたいと、ニヤつと厭らしい笑みを浮かべて答えた。

「そ、マックイーンが完膚なきまでに、徹底的に負けたレースの事だよん」

「……わたくしに完膚なきまでに負けたあなたの言葉とは思えませんわね」

売り言葉に買い言葉。メジロ家家訓、挫かれる前に挫け。つまり、挑発には喜んで乗るべし……というのはマックイーンが勝手に嘯いた家訓だ。

「え〜! 負けてないじゃ〜ん! 去年のウインタードリームトロフィー覚えてないのお? 僕と会長のワン・ツーフイニツシュでえ、誰かさんは何着だったつけえ?」

「通算戦績を鑑みなさいな! わたくしの方があなたに勝ち越していますわ!」

都合の悪い事はなかった事にする前向きなのか、能天気なのかわからないテイオーに溜息する。

ウマ娘とは生来負けず嫌いなものだが、この二人が顔を合わせると負けず嫌いが二乗されるという、なんとも面倒な効果が発揮されてしまう。

「まあまあ、良いからさ。あのレースについて思うところあるんでしょ？」

真つ直ぐな視線が向けられ、思わず視線を逸らしてしまう。

思うところがあがる？ そんなものではない。マックイーンは拳をぎゅつと握り締めた。

「……今更話するような事じゃないでしょう？ あなたも知っているはずじゃありませんか」

テイオーが先程言った言葉は事実。完膚なきまでに、徹底的にマックイーンはライスに負けた。その事ついてあまり彼女は他人に話す気はない。話してしまえば、どんな言葉も言い訳になってしまう。それだけはしてはいけないのだと、彼女は口を閉ざす。

せめて自分だけは、ライスシャワーの勝利を汚しはしない。彼女の誇りがそれだけは許さない。気高き名優のウマ娘は、負けても尚気高かった。

「それに、あなただって彼女と走った事があるでしょう？」

その問い掛けに、テイオーはあつけらかんと「ないよ」と返す。

「これが残念な事にないんだよねえ。真剣勝負の場で、ボクは一度も走ったことがないのさ……鬼が宿ったライスとはね」

どこか憂いを帯びた声に、ああ確かにとマックイーンは頷いた。

「鬼に会えたかもしれない有馬記念で、トレーナーがやらかしましたものね」

黒歴史を思い出したのか、テイオーの口からうつつと呻き声が漏れた。

「今思えば、あの有馬記念は貴方が万全の体調であつたなら、是非観たかつたレースですわ」

ええ、ボクが圧倒的に勝つちやうレースを!と、負ける事など考えもしない負けず嫌いが嬉々として言う。

そんなテイオーに、不敵に笑んで液体窒素のような言葉を振りかける。

「ええ、あなたが直線で鬼に捕食される姿を是非」

マックイーンの言葉にきよとんとし、冗談かと目を見れば、彼女の眼は少しもその言葉を疑っていないようだった。

さすがに冗談ではなく本気で言っているのだと理解し、テイオーは苦笑しながらいやと首を振る。

「ボクが負ける?それはないよ」

「なぜ言い切れるのですか?」

「だって、ライスは長距離に特化しているウマ娘だよ?確かに3000mならわからなけれど、2500mでボクが負けるなんてありえないよ」

ライスシャワーは生粋のステイヤーだ。最後のステイヤーとまで言われるウマ娘で、

長距離では無類の強さを誇る。だが、長距離以外でライスが勝つことはない。それは業界の常識と言っても差し支えない事実だ。

その事はマックイーンも知っているはず。だからこそ、冗談を言っているのではないかとテイオーは疑ったのだが……

「天皇賞について語る事はありませんが、一つ誤解を解いておきますわ」

今から話すことを信じる者がどれほどいるかしらと、心の中で毒づく。

「ライスさんが万全ならば、2000mだろうと問題ありません。いえ、むしろ日経賞以外に勝っていないのが不思議ですらあります」

「敗けるわけがない?」

春の天皇賞の事を尋ねると、三月は嘘偽りなく高慢とも取れる言葉を口にした。

「ええ、負ける姿が思い浮かばないほどに、あの日のライスは完璧な仕上がりと執念を持っていたもの」

「大言壮語もここに極まれりね」

「そうかしら?」

事も無げに首を傾げる三月に、スカーレットは寒気を覚える。

相手は絶対王者とも言われたマックイーン。スタミナ、パワーが限界を振り切ってい

るターフの名優を相手に、不安も何もないなんて信じられる言葉ではない。

「虚言、ではなさそうね。じゃあ、どこで勝利を確信したのかしら？」

「どこで……そうね、マックイーンちゃんをライスが獲物を狩る眼で睨んだときかしらね。これまで沢山のウマ娘を見てきたけれど、ライスのようなウマ娘は初めて出会ったわ。ウマ娘なんて生温い、あの日のライスは飢えた獣の気配を纏っていたの」

そんな馬鹿など一笑に伏せようとするも、スカーレットは当時のレースを思い出し、馬鹿にしようとした笑みが歪んだ。

嘘じゃ、ないかもしれない。マックイーンがあのことについて、聞いても誰にも語らずに唇を噛み締めるだけで答えない出来事がある。

「まさか、マックイーンがゲートに入るのを躊躇ったのって？」

そう、決して臆する事のないマックイーンがあの日、ゲートに入るのを躊躇っていた。ゲート入りを嫌がるウマ娘は珍しくはないけれど、それがマックイーンともなれば話は別だ。誇り高い彼女がゲートを嫌がるだなんて、マックイーンだからこそあり得ない。

もし、もしも嫌がったのではなく、何者かに怯えて二の足を踏んだのだとしたなら

……

「彼女はライスの標的となり、肉食獣さながらのオーラを感じたのでしょうか」

「……鬼、か」

ライスシャワーには鬼が宿ると誰かが言った。大袈裟な表現だと思っていたが、スカーレットはごくりと唾を飲み込んだ。

レースの序盤、確かにマックイーンはいつもの冷静さを欠いていたような走りだった。それでも中盤では持ち直して、いつもの必勝パターンを展開にレースをコントロールした。

そんないつものレースに私はマックイーンの勝利は確実だと……そう、信じていたのだけれど……

「その後の事は、あなたも知つての通りよ」

最後の直線で標的を打ち抜く漆黒の弾丸が、マックイーンの背を打ち抜いた。それどころか、菊花賞の時よりも強く、速く、鋭く、マックイーンと差を広げて圧倒的な勝利をライスシャワーは手にした。

テイオーがいなくなった部屋の中で、わたくしはあの日の屈辱を思い出す。

今も尚あるこの屈辱は、決してライスさんにつけられたものではない。わたくしが、わたくし自身に刻み込んだ自業自得の代物。

あの日、わたくしが鬼に怯え、恐怖し、挫かれた弱さの代償。

わたくししの敗因はわたくししの心の弱さ。それ以外の何物の所為でもない。

入場前の通路で、わたくしを待っていたミホノブルボンの言葉に、わたくしはなんと言葉を返したのか……

ミホノブルボンはわたくしに沈痛な面持ちでただ勝って欲しいと、ライスさんを圧倒して欲しいと願ひ、余計なお世話を口にした。彼女の気持ちを少しでも汲んでいればと思わない日はない。

『わたくしが敗れるなど、奇跡に等しい確率ですわ』

なんと傲慢で、不遜で、怖いもの知らずな言葉なのでしょう。彼女の言葉の真意にも気付かずに。誰よりも優しいライスさんの宿敵は、ライスさんの罅割れた心が壊れてしまわないよう、それだけを願っていた。

瞳を閉じれば、あの日のライスさんの背中が鮮明に瞼の裏に映し出される。

必死に、歯を食い縛って、気力を振り絞って、それでもどんどん遠ざかる小さな鬼の背中。その背に手すら届かない、圧倒的な敗北。

ゴールしたその背中にわたくしは自分自身に誓った。もう二度と、こんな無様な姿は見せない。例え地獄の魔物が相手だろうと、今度こそ怯えずに、勇敢に立ち向かってみせる。わたくしの、メジロの名に懸けて、ライスシャワーという鬼を捻じ伏せて見せる……と。

「それが叶わなくなるだなんて、思いもしませんでしたけれど」



ライスさん、ごめんなさい。あなたを、あなたの中の鬼を殺してしまったのはわたくしでしたわね。

わたくしを叩き伏せた、あの強いレースを終えた彼女の眼に映った絶望。ブルボン、貴方が危惧していた光景がそこにはありました。

『余計なことするなッ!!』『マジで使えねえ』『誰もお前を見に来てねえんだよ』

ありとあらゆる罵倒がライスさんに襲い掛かった。

わたくしに完勝し、今度こそと期待を込めて顔を上げた彼女の顔には、この世で最も汚らしい泥が降り注いってしまった。愚かなわたくしの所為で……

最悪を思い出し、爪が食い込むほどに震える拳を握る。

彼等は何一つわかっていない。その悪意がライスさんを、わたくしの誇りを粉々にした事。

三連覇など、彼女とわたくしの勝負の副賞にしか過ぎない。その程度のもの、わたくしは気にしてなどいません。

誰よりも小さな彼女が、誰よりも強い証明をした瞬間、その強さは砂上の楼閣のように崩れ去ってしまった。

ならば、その強さを取り戻させ、鬼を退治するのはわたくしの役目なのでしょう。

一度は死んだ彼女の中の鬼を、今一度蘇らせてみせる。

捻じ伏せると誓った、わたくしのちっぽけなこの誇りに掛けて……

「もう二度と、あなたの背中をわたくしの眼に映らせませんわ」

「なるほど、それでレースが、ファンが怖くなったと」

取材と言う名目で話を伺うナリタブライアンは、あまりに理不尽で不条理な過去に目を伏せる。

会長からの指示で、ライスシャワーの取材をすることになったブライアンは、なぜ会長が自分にこの仕事を任せただのかを痛感する。

「はい。美月さんには感謝しています。けれど、こう思ってしまったんです。私が走る事で、勝ってしまう事で、喜んでくれる人なんていないと……自暴自棄のような状態でした」

目の前に座る、儂げな少女……ライスシャワーの壮絶で残酷に過ぎる悲運、過酷をこの目と耳に焼き付けさせる為、か。

終わったウマ娘だと揶揄され、嘲笑された三冠ウマ娘と、刺客だとファンに唾を吐きかけられたウマ娘。この出逢いが、再び三冠ウマ娘の魂に小さくとも、強い燈火が宿る事となり、二人の絆の始まりになるとは、当人たちもまだ知る由もなかった。